

# さかなで生きていく - 漁業と港町の生活がつくる新たな魚市場 -

焼津は日本有数の漁獲を誇る焼津港を持つが、市街は過疎化、衰退し、漁港は発展とともに市民の日常生活からは切り離された存在となってしまった。

港町としての魅力が薄れてしまった焼津の漁港のほど近くに、港町の風情や漁業の活動をまちの生活とつなげる魚市場を計画する。魚を生業にする人々、魚目当てでやってくる人々の活動が絡み合い、焼津の港町に住む喜びを感じられる場になる。



# 焼津港さかなせんたー

敷地：静岡県焼津市中港 5 丁目

用途：魚市場、卸売市場、水産加工場、防災公園

建築面積：7206.422 m<sup>2</sup>

構造：鉄骨造

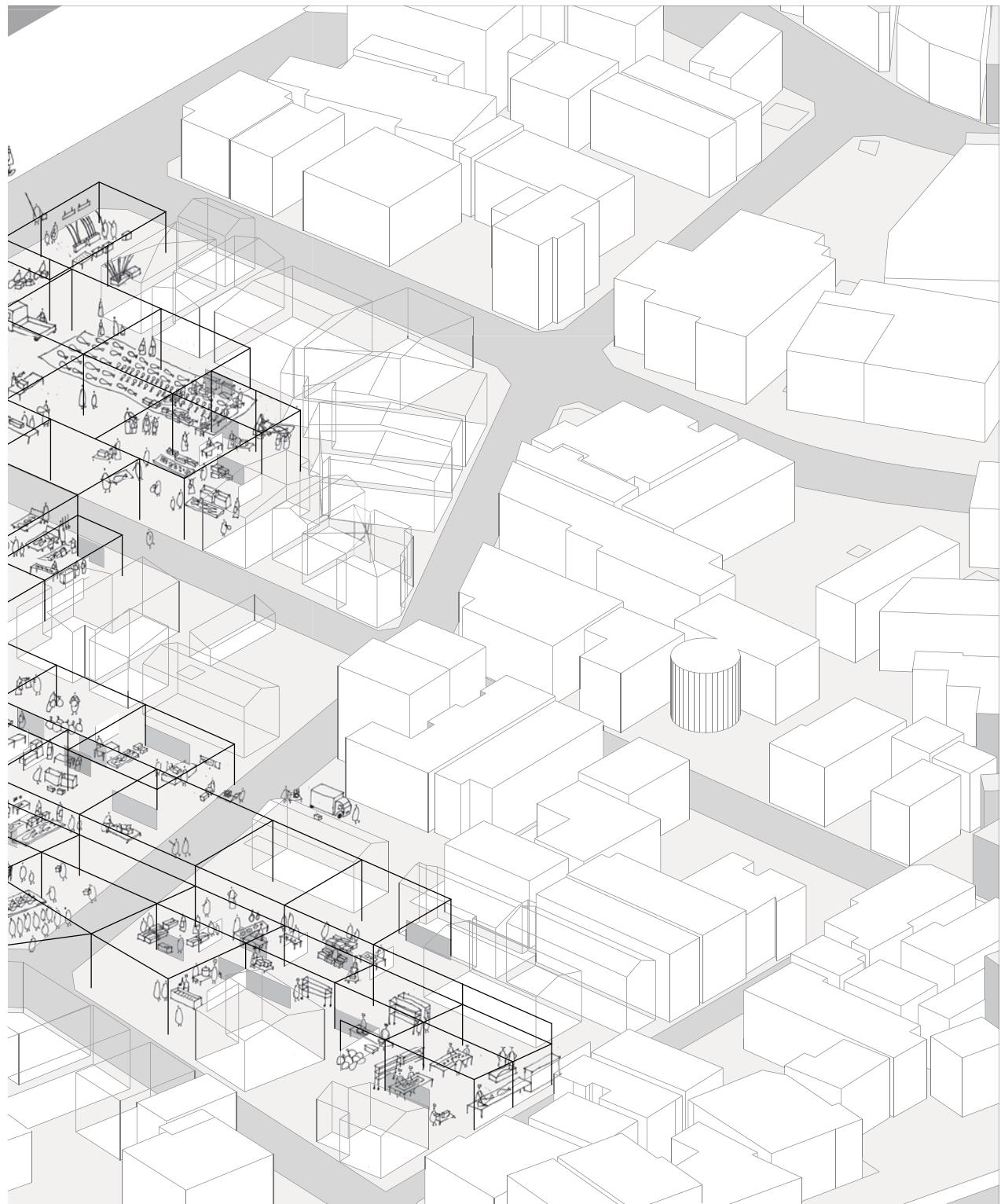
最高高さ：7.2 m (防災タワーは海拔 15 m)

## Special Thanks

YUI Kakizaki  
HONAMI Abe  
KAZUYUKI Sugiyama  
AYAKA Ito  
SOU Nakayama  
RIKA Tokunaga

RISA Matsunaga  
TAKESHI Ogawa

4th grade classmates

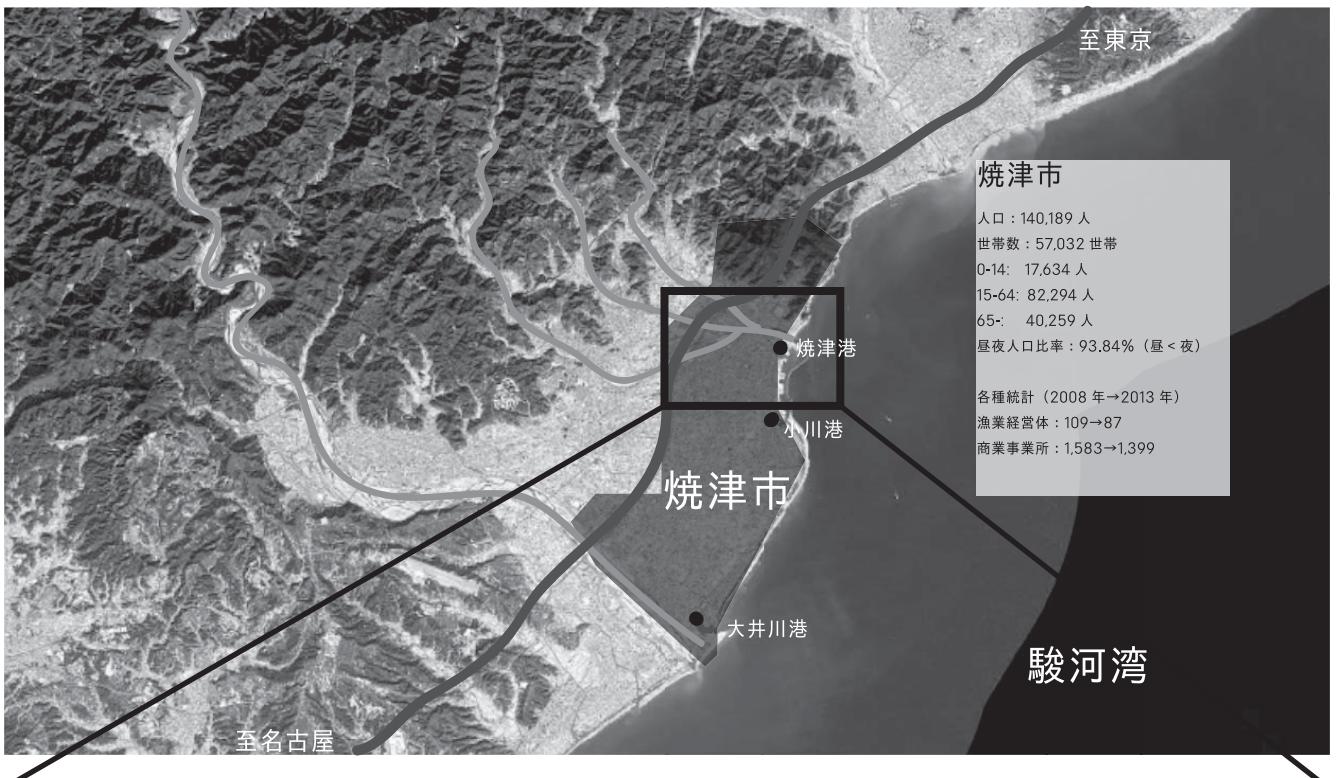


# 01 日本一の水産都市「焼津」

SITE: 焼津港 (静岡県焼津市)

焼津市は大井川、瀬戸川などの河川によってつくられた沖積平野に位置する。

遠洋漁業の焼津港、沖合漁業の小川港、近海漁業の大井川港と、3つの漁港を有している。



焼津港は埋立による拡張を繰り返し、焼津の海岸沿いのほとんどは漁港の施設となっている。

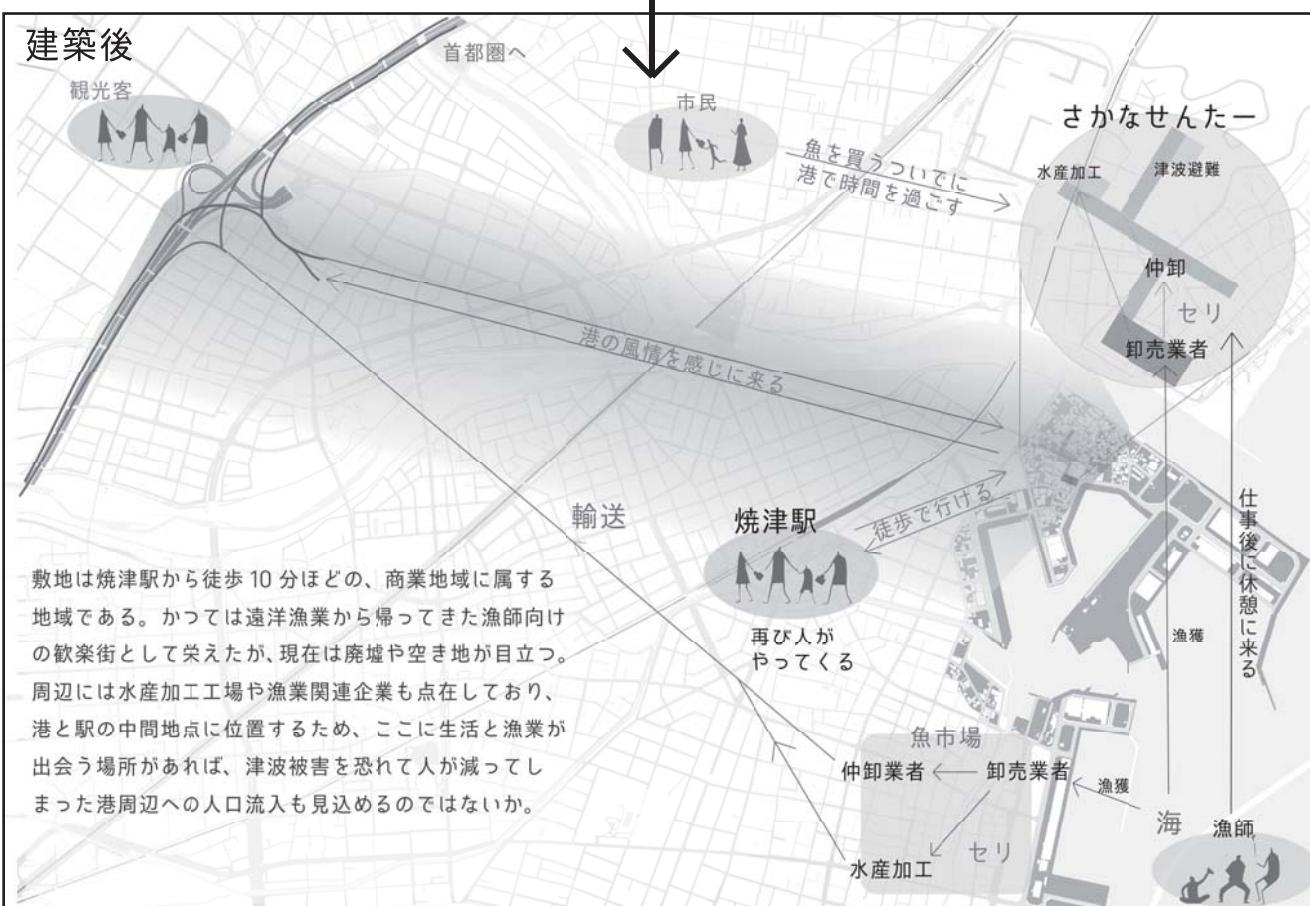
焼津で獲れた魚介類は、直接、または加工工場を経て、主に高速道路で全国各地へ運ばれる。

## 02 人と魚が集まる港町の拠点

### 現状



### 建築後



## 03 配置計画

市場には賑わいの起点となるパワーがある



まちに根を張るように市場を配置する。

周辺の漁業会社や住戸の裏とつながりを持つつ、

さかなせんたーを起点として賑わいが日常の中に延長していく。

research

物が集まる場所→自然と人が集まつくる



人であふれる築地場外市場

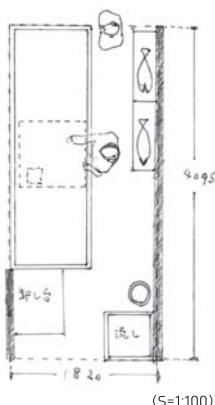


水辺から、セリ・仲卸・場外市場、そしてまちへ  
とにぎわいが連続していく。

## 04 平面計画

魚屋で働く人のための小さい部分のあり方

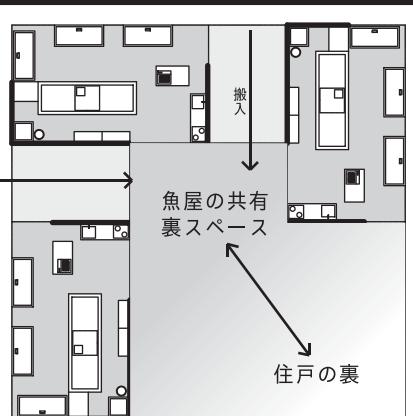
品物の受け渡し、魚を捌く、といった行為がスムーズに行え、欲しいものにすぐ手が届く、手頃な寸法を持ったユニットを計画する。



配置例

裏を共有するように  
複数のユニットを配置する

共有する裏スペースは、住宅の裏と連続し、日常的に触れ合う空間となる。時には魚屋の延長として、時には住戸裏の憩いの場として使われる。



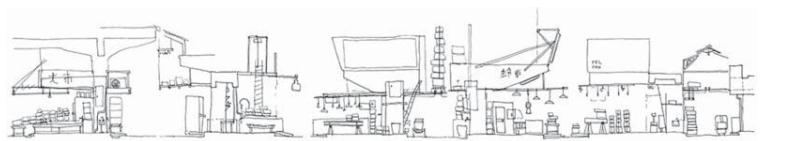
research

小さいユニットを使いこなしている

築地市場では、大空間の中に一つの店に  
1つのユニットが割り当てられている。  
梁を家具のように使いこなしたり、  
1820×4095 のユニットを最小単位として、裏の方へ伸びている。

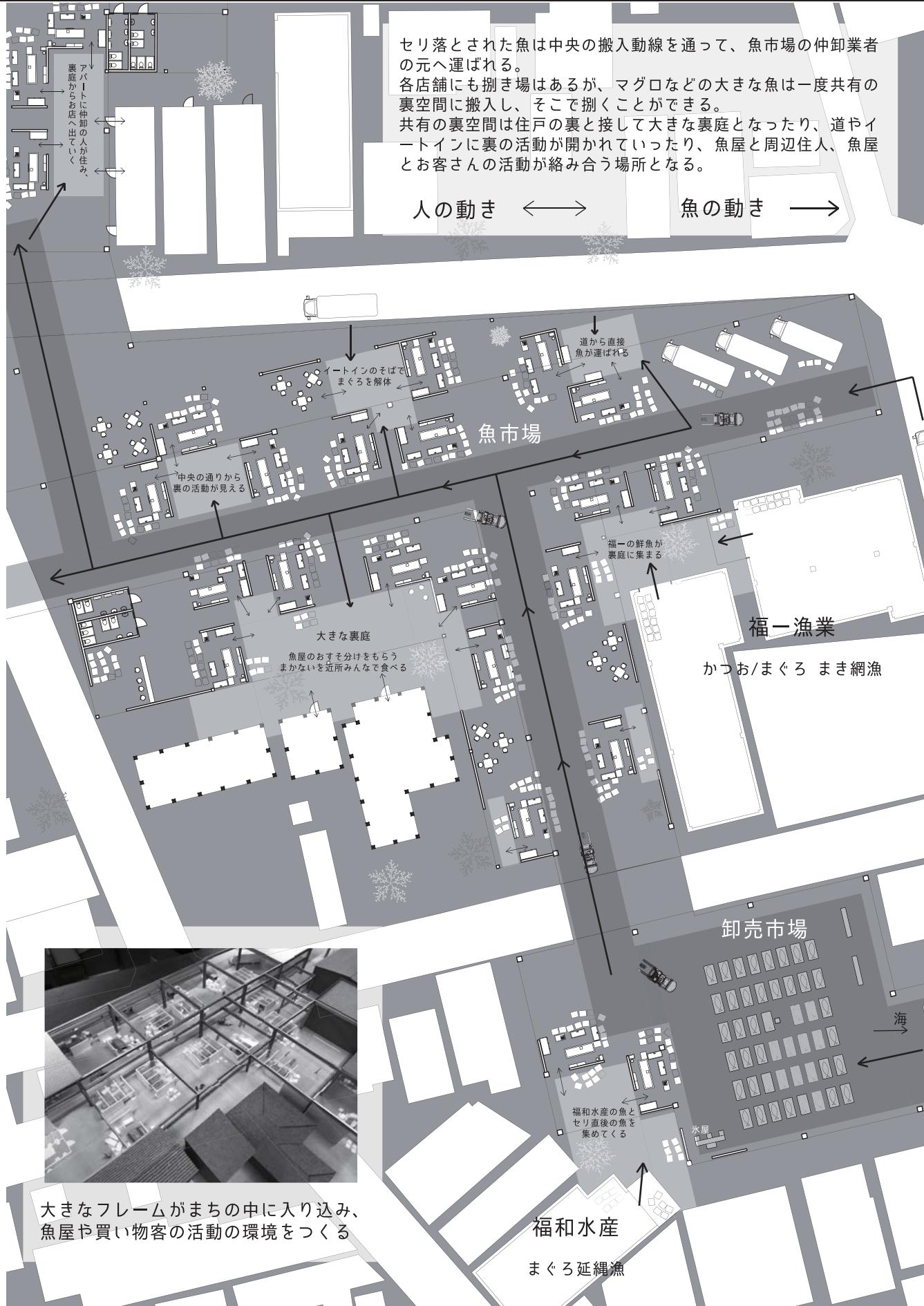


築地市場(仲卸)平面図 (S=1:500)



築地市場(仲卸)断面図 (S=1:250)

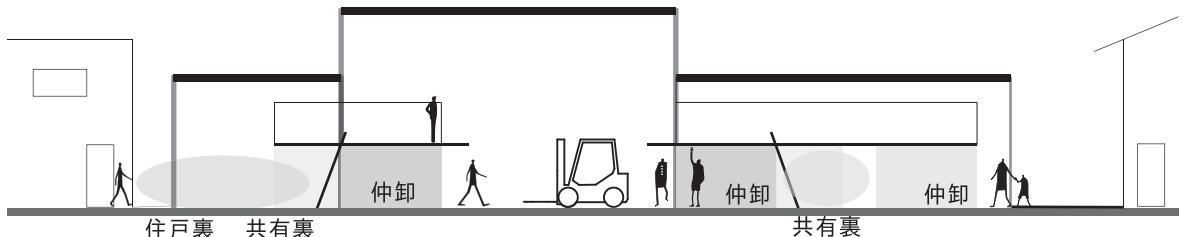
# 05 部分平面図 (S=1:500) まちの裏と市場の裏が大きな裏庭になる



# 06 断面計画

人と物が共存する空間 大小のスケールが重層する

さかなを運ぶ大空間の周りに、住戸の裏と接する中空間、人と人の商いが行われる小空間など、振る舞いにあったスケールを用いる。



## research

物とそれにまつわる活動には、適したスケールがある



small scale

big scale

大田市場



商品を吟味するセリ場は  
低い躯体から商品を照らす



大屋根の下を人と物が行き交う

築地市場

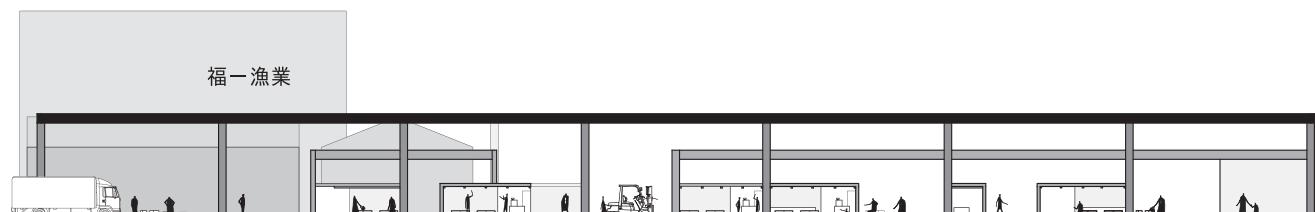


仲卸エリアは低い建物が並ぶ  
低い梁に物がぶら下がる



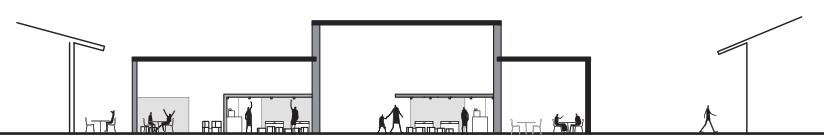
ターレットが狭い隙間を通る

福一漁業



断面 S=1:500

周りの住戸と接する中空間、商いの小空間が、中央のストリートから奥行きをもって見えてくる。  
裏空間では仲卸が休憩していたり、大きな魚を捌いたり、また住人の裏庭になったりと使われ方が変わる。



短手断面 S=1:500



大屋根の下を人と魚が行き交う

## 07 “愛される建築”とは

### 焼津に力を

その思いからこの卒業設計は始まった。

漁港や観光の発展といった目に見える活気に反して、  
まちには目に見えない下向きの空気感がはびこっていた。

焼津の魅力は何といっても**美味しいさかなと海沿いの風情**である。

そう思い、海の近くに住民と漁業がともにある魚市場をつくることを決めた。

「昔は焼津の駅を降りた瞬間、さかなのにおいがした。

でもその度に、『焼津に帰ってきた』と感じた。」

この祖母の言葉が、背中を押してくれた。

少しさかな臭くとも、それが焼津らしさ。

**焼津という港町でしかできない暮らしを営む人々の姿**を見たとき、

焼津で生きる人、焼津に来た人がもっと焼津に愛着を持てるのではないか。

その営みがこの建築の中で見えてほしいと思い、設計をしていた。

小さいころから、焼津には楽しい思い出がたくさんある。

焼津の祖母に胸を張って見せられる作品を、と思い、

直前まで粘ってやってよかったですと心から思う。

